

マンホール茸

川崎ゆきお

夜中だろう。ちょっとした通りだ。水銀灯で照らされ暗い夜道ではない。
ちょうど水銀灯でスポットライトのように、それを浮かび上がらせている。
マンホールから上半身だけを出した人物がいる。
マンホールは道路の真ん中にある。朝まで車が通らないような道ではない。
よく見るとマンホールの上で座っているのだ。その人物が。
お坊さんのようだが着ている物が違う。布一枚巻き付けた程度だ。シーツのようなものだろう。

マンホールがちょうど座布団のように見える。鉄の座布団だ。
その横に歩道があり、そこにも、その小型がいる。マンホールも小さく、座っているお坊さんも小さい。小坊主だ。

さらに遠くを見ると、同じように坊主が生えている。
つまり、周辺のマンホールに、虫でも付いたかのように坊主が沸いているのだ。
妖怪探偵はそれをインターネット上のブログで見た。画家が描いた絵なのだ。
「あれは、どういうことですか」

妖怪探偵は画家を訪ねた。古びたアパートの一室だ。

画家は、答える前に名刺を見ている。

「妖怪探偵？」

「はい」

「はいじゃないでしょ、はいじゃ」

「何か？」

「冗談は、私には通じない」

「いや、妖怪探偵とは、まあ、妖怪を調べる職種でして……」

「そんなもの、あるか！」

「あるんです。それでお聞きしたくて」

「絵を買いに来たんじゃないのかね」

妖怪探偵が見たブログはショッピングサイトのようなもので、画家が絵を売るために作ったらしい。

「あれは実在しますか？」

「あれって、何だね？」

妖怪探偵はマンホール坊主の写真をプリントアウトして見せた。

「ああ、これかい。これは想像だよ。絵なんだから」

「こういうマンホール茸のようなお坊さんを見たわけではないのですね」

「当たり前じゃないか」

「では、そのイメージはどこからきたのでしょうか」

「思いつきだよ」

「これって、妖怪ですよ」

「知らない。そんな意味で描いたわけじゃない。私は妖怪画は描かない。面白いイメージだから描いただけのことだよ」

「それは残念」

「君は妖怪を探しているのかね」

「はい」

「食えんだろ」

「はあ」

「誰かに頼まれたのかね」

「いいえ、自発的に」

「どうして、食べてるんだ」

「ああ、それが問題でして」

「私も絵では食えない。誰も買ってくれない。だから、こうして奇抜な絵を無理に描いて、客を掴もうとしているんだが、反応は君だけだ。しかも買いに来たわけじゃない」

「似てますねえ」

「似ていない。私は正業だ」

「はあ？」

「はあじゃない。ふつうの画家だよ。だが君の職種は存在しない」

「ああ、なるほど」

「大丈夫かね、君」

「心配をかけて、申し訳ありません」

「妖怪を見つけても金にはならんだろ。それに第一妖怪などいないでしょ」

「いえ、いるかもしれません」

「いたとしても、君はそれをどうやって金に換えるのかね」

「ああ、だから、僕の場合、職業ではなく、趣味です」

「あ、そう。じゃ、ご苦労様。ここには妖怪はいないから、もう帰りなさい」

「何か、手がかりが得られると思ったのですが、イメージでしたか」

「画家のインスピレーションだよ」

「その絵、売れるといいですねえ」

画家は答えない。

妖怪探偵はすぐに部屋を出た。

その後、妖怪探偵は夜道に行くびにマンホールを気にした。

しかし、坊主が生えたように座っている姿は見かけない。

当然のことだろう。

了